

## ハイデルベルク信仰問答講解説教 14 「わたしたちと同じように」(2011年11月27日 礼拝説教)

## 【聖書箇所】

ダビデはあなたの僕／あなたが油注がれたこの人を／決してお見捨てになりませんように。主はダビデに誓われました。それはまこと。思い返されることはありません。「あなたのもうけた子らの中から／王座を継ぐ者を定める。あなたの子らがわたしの契約と／わたしが教える定めを守るなら／彼らの子らも、永遠に／あなたの王座につく者となる。」(詩編132:10-12)

ところで、子らは血と肉を備えているので、イエスもまた同様に、これらのものを備えられました。それは、死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者たちを解放なさるためでした。確かに、イエスは天使たちを助けず、アブラハムの子孫を助けられるのです。それで、イエスは、神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となつて、民の罪を償うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです。事実、御自身、試練を受けて苦しめられたからこそ、試練を受けている人たちを助けることができになるのです。(ヘブライ2:14-18)

## 【説教】

本日より待降節に入り、クリスマスに向けて備える日々を過ごします。その待降節の最初の日曜日に、偶然にもとても相応しい信仰問答のところが備えられました。今日は第14主日問35-36のところを読みます。ここは使徒信条の「主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ」の部分についての問答になりますが、言うまでもなくクリスマスの出来事について教えています。

今年もわたしたちはクリスマスを迎えますが、とすると、日々の忙しさの中で何のためにお祝いしているのかわからないで、ただお祝いしているということもあるかもしれません。惰性的に毎年の習慣になっているということもあります。世間の人々に対して「クリスマスの意味も知らないで」と半分いぶかしげに思いながら、またどこか高飛車に構えながらも、案外自分たちも似たり寄つたりしているところがあるのではないかと。改めてその意味を問い直しながら、クリスマスを迎える相応しい姿勢を作りたいと思います。

早速、問35から読みましょう。ここはキリスト教の教理で言えば、「受肉」という教理になります。受肉とは、一言で言えば、真の神さまがわたしたちと同じ肉体をとって、真の人間になられたという教えです。そしてここにまた神人両性という一つの教理が成り立ちます。つまりイエス・キリストは真の神さまにして同時に真の人間であるということです。古代教会の時代から教会は多くの戦いを経てこの教理を確立してまいりました。それというのも、実はこの教理がキリスト教信仰の土台となる部分だと申し上げてもよいのです。言わば最初のボタンであり、ここで間違えると聖書から正しく福音を聞き取ることができなくなるのです。ですから慎重に教会はこの教理の確立を目指しました。しかし、ここがなかなか克服されずに今日に至っても教会の中で混乱を来すということがあります。イエス・キリストの神性を否定して、主イエスはただの人間に過ぎないとしたり、また逆に人性を否定して、その人間としての性質は仮の姿であると主張したりします。そのいずれも福音とは異なる理解になります。

福音書の中で、主イエスが弟子たちに「あなたがたはわたしを何者だと言うのか」と尋ねられるところがあります。それに対してペトロが「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えました。この答えが教会の信仰告白の基本となりました。結局、教会が何を信仰として告白しているかと言えば、それは主イエスがわたしにとってどういう存在かということです。どのようなお方として主イエスを捉えているか。ここでわたしたちの信仰は真に信仰にもなるし、そうではない異質なものにもなる。ですからここはいい加減にしてはなりません。

このハイデルベルク信仰問答でも、非常に、丁寧にこの部分は言葉を重ねている印象を受けます。主イエスについてまず「永

遠の神の御子、すなわち、まことの永遠の神であり、またあり続けるお方」としています。前回のところ問33でも、神の独り子ということについて「キリストだけが永遠からの本来の神の御子だからです」と述べています。それは主イエスをまことの神さまと言いつつ表しているところです。ここに「永遠」という言葉が繰り返されておりますが、まさしく神さまは永遠であります。そして主イエスはその永遠をもったお方、神さまなのであります。それに対して人間は有限な存在です。この存在には限りがある。そこが神さまと人間との決定的に異なるところです。前回の説教でも強調されましたが、神さまと人間との本質的な違い、隔たりがここにも表されていると理解してもよいでしょう。ここを弁えることが非常に重要です。

というのも、日本では、身の回りの自然や人や動物が当たり前のように神になる、いわゆる「汎神論」的な神観というものがあります。すべてが神のような存在になります。石や木を拝む。蛇や狐が神になる。また人間も神になる。成仏すると言います。仏になる、そのように高められたところに救いがあるとします。また「解脱」と言って、この世を離れていくことが救いであると説く。そのようにすべてのものが神のような存在に達していく。神と被造物の隔たりが極めて曖昧なのです。そういう神観は、キリスト教の信仰とはまったく違います。

聖書の信仰は、創造主と被造物、神さまと造られたものとの間には越え難い隔りがあることをはっきりいたします。造られたものが神になるということは決してありません。神さまは神さまであり、造られたものはどこまでも造られたものです。しかも忘れてはならないのは、造られた人間は罪を犯して樂園を追放されたということです。そこには隔りというより深い断絶があります。決して越えることのできない深い溝ができてしまった。そこにわたしたちは立たなければなりません。造られたものが容易に神になるという世界ではないのです。

しかし、この人間の状態、神さまとの深い断絶を弁えることが、神さまの愛、憐れみを知る最も重要な鍵となります。それは、この断絶を越えて、神さまがわたしたちの世界に足を踏み入れてくださった。もはや関係が絶たれてしまったと思われるところに、新しい関係を築いてくださった。それがイエス・キリストの存在であり、これからわたしたちが迎えようとするクリスマスの出来事なのであります。

信仰問答は、この永遠なるお方が、「聖霊の働きによって、おとめマリヤの肉と血とからまことの人間性をお取りになった」と言いつつ表します。ここに真の神さまが同時に真の人間であることが明らかにされます。「肉と血」とあるのは、そこで主イエスは、わたしたち人間と同じ肉と血を備えられたということに他なりません。それは今日読みましたヘブライ人への手紙にも記されており、「ところで、子らは血と肉を備えているので、

イエスもまた同様に、これらのものを備えられました」(2:14) 同じ肉体をとられた。どうしてでしょうか。その理由もヘブライ人の手紙は記しています。「それは、死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者たちを解放するためでした」

ここに「奴隷の状態」とあります。それは、人間が罪を犯して悪魔の虜、罪の虜になっているからです。また同時にそれは罪によって死が入り込んだのですから、死の虜にもなっているということでしょう。罪の人間は、そのような奴隷の状態にあります。そういう血と肉をもって人間は生まれてきます。問36では「罪のうちにはられました」と言います。人間は生まれながらにこの罪を負うのです。それがアダムから始まる罪の人間の系譜です。それはもちろん人間が悪いのです。神さまは良いものとして人間を造られ、樂園に住まわせてくださった。それは御自身の永遠の中に、そのつながりの中に置いてくださったということです。それにも関わらず、その恵みを忘れて、神さまとの約束を破ったのです。

しかし、そうのように自ら背いて、奴隷の状態に陥ったわたしたちを神さまは放っておかれませんが、その罪と死の支配に自ら踏み込んでいかれ、そこでわたしたちを捕らえてくださる。それがクリスマスの出来事であり、この受肉という教理が教えていることなのです。

信仰問答は、問35で「罪を別にしてはすべての点で兄弟たちと同じようになるためでした」としています。これは今日読んだヘブライ人の手紙に根拠があります。2:17-18。先ほど、神さまと人間との隔たりを覚えることが神さまの憐れみ、愛を知る鍵になると申しました。それは神さまはこの隔たりを御自身で乗り越えてくださる。わたしたちがその高見に達するものではありません。登り詰めていくではありません。神さまの方がこの低い状態にくだられる。これをキリスト教の言葉で謙卑と言います。フィリピ書第2章を思い浮かべられる方もおられるでしょう。「キリストは神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました」(2:6-7) そのようにわたしたちと同じように血と肉を備え、その奴隷の状態に身を置かれるのです。しかもそれだけではありません。主イエスは十字架におかかりになられます。罪の極みとしての死を経験される。そこまで神さまの憐れみは徹底されるのです。でもそれはそこまでされなければ、本当に人間を救うことにはならないということです。それだけ人間の罪は重いということです。

ヘブライ人の御言葉では「御自身、試練を受けて苦しめられたからこそ、試練を受けている人々を助けることができになるのです」(18節)としています。ここに聖書の示す神さまの完全な救いが表されています。それは神の全能性と理解してもよいでしょう。神さまは罪と死の虜にあるわたしたちをそこから救い出すために御自身を捨てて、試練を受けて、それは十字架の死ですが、そのように同じところに立たれた。わたしたちはその御業によって、再び神さまの子として迎えられるのです。

ある牧師は「まさに世界を神の手に奪い返すためにおいでになった」と言います。あるいは、この信仰問答を書いたウルジヌスは「この神こそ、我々が失った命と義を勝ち取り、取り戻してくださいました」と言います。それは奪い返す、また勝ち取るという激しいもの。その罪の奴隷からわたしたちを奪い返す。戦いです。罪との戦い、わたしたちを奪還する。そのために主イエスはわたしたちと同じように肉と血を備え、これをすべて担われた。

今日から教会はアドヴェントです。アドヴェントという言葉から、英語のアドヴェンチャーという言葉が生まれます。アドヴェンチャーは冒険ですが、前人未到のところに踏み込んでいくこと。主イエスの到来はまさに神さまの冒険、アドヴェンチャーがある。冒険は危険を伴う。しかし神さまはその危険をお

かしてもなお、わたしたちのために自らこの罪の世に踏み込まれた。そしてわたしたちの近くに来てくださった。クリスマスはその神さまの近さを喜ぶ時であります。もちろん隔たりはあります。越え難い隔たり。しかし神さまはこれを越えて、そこからわたしたちを奪い返すのです。御自身の命の下へ。

この神さまの御業に生かされたわたしたちは、わたしたちもこのように隔たりを越えることができるのではないのでしょうか。わたしたちにも様々な隔たりがあります。それをあきらめてしまうのではない。わたしたちはもっとお互いが分かり合える存在として生きているのです。人間はそういう深さをもっています。相手を思いやったり、共感する深さです。相手の気持ちを理解したり、その痛みや悲しみを想像する深さです。最近、牧会をしていて感じることは、教会でもコミュニケーションが不足している。同じ信仰に生きる兄弟姉妹と言いながらも、お互いが分かり合えない。すぐその言葉で傷ついたり、傷つけたり。こういう言葉を発したら相手がどう感じるのか、そのことが想像できない。こういう態度をしたらどう感じるのか。またこのような言葉を発した相手の気持ちを察してあげられない。背景にあるものを理解してあげられない。表面的な関わりです。でも本当の関係はそこからです。問36を読みましょう。仲保者であるイエス・キリストがおられる。自ら罪を覆い、御前に執り成してくださるキリストが間に立たれる。その関係の中に共にいてくださる。だからわたしたちも勇気をもって、隔たりを越えて行けるのです。祈りをささげます。

天の父。罪の虜にあるわたしたちをそこから奪い返すために、独り子を与えてくださいました。わたしたちのためにこの罪の世に身を置いてくださった神さまの憐れみを感じる事ができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。